

四季とマンマ・ミーア

浅利慶太

ここ電通四季劇場「海」のこけら落とし公演から八年。以来、『マンマ・ミーア!』は全国各地で二〇〇〇回を超える上演を重ね、多くのお客様に楽しまれてきました。そして再びスタートの地に戻り、一層深まった舞台をご覧いただける。実に嬉しいことです。

四季が上演を発表した当初は、随分と意外な演目にチャレンジするのだなとお感じになった方が多かったように思います。「ABBAのヒットナンバーを集めたライブショーですか」と尋ねられる方もいました。当時の日本では、既成楽曲だけで音楽を構成する「カタログ・ミュージカル」はまだ馴染みが薄く、特に『マンマ・ミーア!』はその先駆的な存在でしたので、誤解も多かったでしょう。

しかし既にロンドンで観劇していた私は、ABBAのヒットソングをそのまま用い、その歌の力を存分に使ってドラマを運んでいくこの舞台の新しさにとっても感心していて、この作品であれば、今までのお客様はもちろんのこと、あまり舞台をご覧になったことのない方々にも、演劇の感動を届けることができると確信していました。

理由は三つあります。まずは何と言っても、ABBAの楽曲の凄さ。「ダンシング・クイーン」、「チキチータ」、「S.O.S」等々、誰もが必ず耳にしたことがあるそのメロディーは、観客を否応なく物語の世界へと引っ張ります。そのポピュラリティーこそ、作品最大の強みといえるでしょう。

二つ目は、明るく開放感のある「人生賛歌」ということでしょうか。常夏のエーゲ海を舞台にした若い娘の結婚騒動といえば、実に陽気な印象を受けますが、その中に描かれるのは、いわゆる等身大の人々が、人生の辛苦を噛み締めながら前向きに逞しく生きようとする姿です。まさに四季作品に共通する「人生は生きるに値する」というメッセージが謳われています。

そして三つ目。それは「女性の力」です。「ダイナモス」のメンバーをはじめ、このミュージカルにはパワフルでエネルギー溢る女性たちが大勢登場します。それだけではありません。このミュージカルの骨格を作った方々も全員女性なのです。ABBAの楽曲をミュージカルにするという前代未聞のアイデアを実現した、プロデューサーのジュディ・クレマーさん、そしてその歌詞をユニークなストーリーに仕立てた台本のキャサリン・ジョンソンさん、それらをまとめたオリジナル演出のフィリダ・ロイドさん。この三人の女性が、女性ならではの視点を存分に活かし、自由な発想力で創り上げた作品、それが『マンマ・ミーア!』なのです。

毎作品、開幕に至るまでには様々な試行錯誤が繰り返されるものですが、この『マンマ・ミーア!』も例外ではありませんでした。

とりわけ難しかったのが「ABBAの日本語歌詞」です。これまでほとんど翻訳を許さず、英語で歌うことしか

認めてこなかった彼らを納得させる日本語歌詞を作らなくてはなりません。もちろん私は今までに多くの海外作品を手掛けてきましたから、日本のお客様の心情にフィットした台詞や歌詞を作るノウハウは持ち合わせています。しかしこの作品では本当に苦労することが多く、身を削る思いでした。通常の三倍は気を遣ったと思います。

例えば、彼らは音が半拍ずれるという理由で、「促音（小さな『っ』）」の使用を控えるようにと言っていました。そうすると「行ってくる」や「買ってくる」などの言葉が使えません。促音を抜いた訳詞作業は、四分の三程度の日本語の中から歌詞を生み出すような感覚です。これには本当に参りました。また語尾の響きをなるべくオリジナルに似せたり、「dancing queen」といったおなじみのフレーズはそのままに残したりと、いろいろ工夫をしました。

その甲斐あって、楽曲の持っているメッセージを損なわない自然な流れをもった歌詞になったと思います。東京初演の初日には、プロデューサーのジュディ・クレマーさんや、アンドリュー・トレイガスさんがいらっしやいましたが、興奮の面持ちで私に握手を求めてきました。そして何よりもご覧になったお客様の拍手が鳴り止まない苦労はしましたが、A B B Aのメッセージを、ようやく日本のお客様に届ける事が出来たと実感した瞬間でした。

難産の末に産み落とした愛すべき作品ですが、久しぶりに稽古場を訪れると、オリジナルの洗練された状態から、知らぬ間に余計なモノが付着してしまったように見えました。そこで、この東京公演に先行すること半年、新都市ツアー公演（広島、静岡、仙台）の稽古時に、改めて台本を見直し、作品を一から構築し直す作業を行いました。

俳優たちに徹底したことは、「歌」が「ドラマ」を紡ぐ形式である以上、この作品ではA B B Aの曲を聴かせることが第一であるから、セリフや歌詞、メロディーの一音一音、リズムを正確に歌うということ。ただし曲を聴かせると同時に、ストーリーが二次的にならないよう、ドラマの流れを意識してというものでした。英語圏であればメロディーから自然と歌詞を連想できますが、日本ではそうは行きません。したがって、オリジナル版よりも細やかな心理の動きを表現する必要があるのです。

こうした稽古を充分に行ったことで、ドラマのうねりを、よりシャープにすることができたと思います。新都市公演をご覧になった多くのお客様からも、「楽曲の楽しさはもちろんだが、ドラマとしての魅力が高まった」とお声をいただきました。

八年という旅路の末、『マンマ・ミーア!』は東京に凱旋しました。しかし、日本は未だに深い閉塞感の中から抜け出せず、多くの方々が夢や明日を信じる事ができない状態にあります。「アイ・ハブ・ア・ドリーム」——。こんな時代だからこそ、人生の希望を描いたこのミュージカルの輝きが、皆様の心に届くようにと願っています。